

初挑戦の草木染めに笑顔

ふしぎ理科実教室 地域住民招待し交流も

と緑茶を使った「媒染色（草木染め）」に挑戦した。講師は、青森県内の学校で「1日体験科学教室」などを行っている弘前大学大学院の杉江瞬さんが務め、染色の仕組みを分かりやすく解説。初めての試みとして、園児の祖母世代の住民を招待し、実験を通じた地域交流も行われ、媒染液を変えると布の色も変化する様子に「すーい」「楽しい」と笑顔が広がった。

理科実験教室は、園児たちの可能性を楽しみながら育む活動の一つで、2〜3カ月に1回のペースで実施。今年度は、「静電気実験」を皮切りに、「空気砲」や「人工イクラづくり」などに挑戦しており、夏には、弘前大学の教授を招いた「特別理科実験教室」が開かれ、液体窒素を使った冷凍実験を親子で楽しんだ。

また、同園では、子どもたちの元気な姿を見てもらい、地域全体で子育てや見守りに理解を深めてもらいたいと、開園当

初から「地域交流」に力を入れている。特別理科実験で保護者も子どもたちと同じように楽しんでいる様子が見られたことから、「新たな交流機会になれば」と地域住民6人を園に招待した。

色が抜けてしまうため、色を定着させる「媒染」が必要だと伝えると、園児と一緒に聞いていた大人たちも「知らなかった」と声を上げた。

実験では、杉江さんが「タマネギの皮や緑茶、ブルーベリーなどの材料を熱湯に入れて色を出した液体を『染料』と言います。これに布を浸すと、色を付けることができます」と説明。園児らは事前に決めた「タマネギの皮」と「緑茶」の2グループに分かれると、1人1枚綿の手ぬぐいを折りたたみ、ビニール紐で結んで「絞り」を施すと液に浸した。

染色に約30分掛かることから、この間にスライドや映像を見ながら「布は糸を編み込んで作られていて、糸の隙間に染料が含まれている科学物質が入り込んで色が付く」と杉江さんが解説。染液に濡れたり、洗濯をすると

最後はいよいよ自分たちで結んだハンカチの紐をほどく工程。鮮やかな絞りの模様が登場すると「きれい」「スゲー」など歓声が上ががり、園児たちの笑顔が広がった。

参加した地域住民は「初めて草木染めを体験したが、楽しかった。子どもたちの反応も可愛くて、素敵な時間がすごかった」と笑みを見せた。



染色実験を通じて地域住民と交流する園児たち



絞りを解いて現れた模様にも大人も子どもも大喜び

わんぱくはうす

鹿角市花輪の「わんぱくはうす」（杉江由美子園長）で21日、年長児16人を対象にした「ふしぎ理科実験教室」が行われ、園児たちがタマネギの皮